

# 7 長崎周辺海域におけるホシザメおよびシロザメの 生活史と資源について

Biological aspects of *Mustelus manazo* and *M. griseus* off the northwest Kyushu

山口教子・三代岳樹・池田真理（長崎大学水産学部）・田中彰（東海大学海洋学部）  
Atsuko Yamaguchi, Takeki Mishiro, Mari Ikeda (Faculty of Fisheries, Nagasaki University),  
and Sho Tanaka (School of Marine Science and Technology, Tokai University)

ホシザメとシロザメはどちらもドチザメ科ホシザメ属に属し、日本周辺の沿岸域に普通に見られる小型種である。これらはまとめて漁獲される上に肉質が良いため、資源としても利用価値の高い種であり、ホシザメは従来から日本全国で、シロザメは西日本を中心に漁獲対象となり利用されている。しかし近年、ホシザメは全国的に著しい減少傾向にあり、現在ではほとんど漁獲できない海域もみられる。

長崎周辺海域では、サメ類を主として湯引きや煮付け用に利用する習慣があり、その代表種としてかつてはホシザメの水揚げも多かったといわれるが、現在ではその資源の減少は深刻な状態にある。有明海や橋湾、大村湾では、今ではほとんど漁獲されることがなく、水揚げされるのは専ら五島列島周辺と長崎西岸域に限られている。その一方で、有明海や橋湾ではシロザメが比較的安定して漁獲されている。過去の漁獲統計がなく、漁獲量の変化を見ることはできないが、漁業者たちへの聞き取りを行ってみると、どの海域でも共通して次のような話を聞くことができた。「以前はシロザメに比べてホシザメの漁獲量が多かったが、ホシザメの漁獲量が減少し始めた頃から逆にシロザメが増加し、現在ではシロザメの方が圧倒的に多くなってしまった。」

通常、資源が減少すると、資源特性値に様々な変化がみられるといわれる。例えば、成熟年齢の低下、魚体の小型化などがあげられるが、実際にそのような観察が行われた例は少ない。そこで、資源が減少したと思われるホシザメについて、まずは現在（2001年～2002年）の生活史特性を調べた。次に、過去と比べてどのような変化が見られるのかを調べるため、1979年に公表されたホシザメの年齢と成長に関する研究（Tanaka and Mizue）をもとに、当時の資料を用いて再度成長式を求め、成熟に関するデータも併せて、年齢と成長、成熟等に関する特性について過去と現在との比較を行った。その結果、過去に比べて成長は少し良くなっており、成熟体長は大きく、一腹あたりの平均胎仔数は現在の方が少ない傾向が見られた。交尾期や出産の時期などには大きな変化は見られなかった。また、同じ長崎周辺海域に生息する同属のシロザメについても生活史特性を調べたところ、シロザメはホシザメに比べて成長が良く、一腹あたりの胎仔数はホシザメよりも多いことがわかった。

以上の結果をもとに、この講演では長崎周辺海域におけるホシザメ資源の現状、現在の生活史、過去との比較、シロザメの生活史について発表する。また、最後に、生活史特性がホシザメとシロザメ両種の資源動態に及ぼす影響について、特に食性と繁殖特性の面から考察する。